3　「自我同一性」評価尺度の教育相談への活用

「ＲＥＩＳ高校生用短縮版」を活用した指導援助の実際について，事例を通して考察する。

(1)　不登校男子高校生の事例

①　問題の概要

高校１年生のＢ男は，高校入学後，１学期は休まず登校していたが，２学期から，時々欠席が始まった。そして，11月に遠足を欠席したのを契機に，不登校状態となった。３学期からは，進級したいという気持ちから保健室登校を始めたものの，なかなか教室には復帰することができずに，当教育センターに相談に訪れた。

②　資料

(ア)　家庭環境

○家族構成　両親，姉（高校２年生），Ｂ男

＜父＞まじめで仕事一筋。スーパーの店長をしており，土曜日曜を休むことはない。

＜母＞まじめな性格で，口数も少なく，近所つき合いが苦手。

＜姉＞明るく活動的。成績優秀。

(イ)　成育歴および症状の変遷

Ｂ男は，出生時，早期破水があり，仮死状態で生まれた。始語が２歳，始歩１歳６か月と発達全般に遅れぎみであった。

小学校低学年のころは落ち着きがなく，授業中，突然関係のないことを先生に話しかけたり，突然教室から飛び出してしまうこともあったりして，周囲を気にしない学校生活を送っており，よく先生に怒られていたようだ。

この落ち着きのない状態は高学年にはおさまり，同時に，周囲からどう見られているかが気になるようになった。また緊張すると吃るところがあり，そのことも気になるようになった。

中学校においては，「いじめ」とはいえないものの，級友からからかわれることが多かった。Ｂ男自身は，そのことを嫌がってはいたが，人間関係で軋轢を起こすことはなかった。引っ込み思案の性格や消極的な対人行動も，このころから始まっている。

Ｂ男は，運動が苦手で，中学校では部活動をやっていなかった。そのため，授業が終わるとまっすぐ帰宅し，級友との交流もほとんどなかった。

高校入学後は，部活動にも参加するようになり，まじめに活動していた。また，部活動での対人交流も始まり，学校生活に適応しているように見えた。

しかし，夏期休業以降，時々欠席するようになり，11月の遠足を欠席したのを契機に，不登校状態となり，教育センターを訪れた。

(ウ)　性格・行動の特徴

Ｂ男は，まじめな性格で，反社会的問題行動を示す様子はまったく見られなかった。一方，対人交流は苦手であり，対人緊張が高く，学級においては孤立傾向にあった。やや吃ることも，人づき合いが苦手な原因になっていた。

③　指導援助の経過

Ｂ男は不登校のきっかけとして，部活動のことをあげた。高等学校入学後は，運動部で活動していたが，連日の練習がやや負担になり，夏期休業中に部活動を無断で休んでしまった。このため，２学期以降は，練習にも参加しにくくなり，部活動の先輩や同級生を避けるようになった。このため，時々学校を休むようになっていった。

学校行事にも参加しにくくなり，11月の遠足を無断欠席した。以後，周囲からどう思われているか気になるようになり，不登校状態となっていった。

社会性の発達がやや遅れており，対人緊張が強いため，受容的なカウンセリングを心がけ，Ｂ男とのラポール形成に努めた。また，対人不安や対人緊張を和らげることが重要であると考え，初期の段階においては，週２回の高い割合で，面接を継続した。

Ｂ男は，劣等感が強く，自己否定的感情が強いことが，対人不安を高めている大きな要因であると考えられた。そこで，カウンセリングの中では，Ｂ男の考えに対して，受容的・肯定的に応答し，自己肯定感を高めていくようなかかわりを重視した。

また，言語的コミュニケーションだけでなく，将棋やオセロなどのゲームも取り入れながら，非言語的な面も含め，人間関係を楽しむことに配慮した。Ｂ男も打ち解けて会話ができるようになり，表情や